

## だいきのひみつ

徳之島町立亀徳小学校 三年 要 柚輝

「おばあちゃん、ただいま。」

ぼくは、たった今、お父さん、お母さんと三人で大阪からひこうきでやって来た。名前はだいき。動物や虫が大好きな小学三年生の男の子。毎年夏休みになると、おじいちゃんとおばあちゃんの住む徳之島で、虫とりや森のたんけんをするのを楽しみにしている。

ここにいる間、ぼくは毎日おばあちゃんの家のうら山をたんけんするのがにっかだ。ようち園のころから続けている。だれにも言っていないけど、じつは、森には友だちがいるんだ。それはアマミノクロウサギの「アマ」とケナガネズミの「ケーナ」。早く会いたい。ぼくの大阪の話を聞かせたり、森のようすを聞いたりしたい。森も毎年、どんどん変わっている。世界自然いさんになってみんなが注目してくれたり、生き物を大切にしてくれたりするようになった話を聞くとうれしい。でもアマやケーナたちが困ることが起きることもあるから、ちよつと心配なんだ。

昼ご飯を食べてから、ぼくはさつそくアマたちに会いに行くことにした。

「おばあちゃん、うら山のさん歩に行ってくるね。」

「じゃあ、おやつを持って行きなさい。」

ぼくのにっかなので、いつもどおり、送り出してくれた。少しほそい道を進んでいくと広場に出る。そこには大きな木が立っていて、その下にいると夏でもとてもすずしい。そして、そこにいるとなぜだかいつもアマが来てくれる。すわつてまっぺしていると、後ろの草むらからカサカサツと音がして、

「だいきくん、まっぺいたよ。」

「すごく大きくなったね。」

と、アマの声がした。うれしくなって二人で手をつないでぴよんぴよんとびはねた。これも毎年することなんだ。するとそこへ、

「おそくなつてごめん。」

と、ケーナが息をきらして走って来た。れんらくもしていないのに、ぼくが来ることを知っているのはやっぱりふしぎ。

ぼくたちは、一年分の話をたっぷりしてから、おやつを食べることにした。ふくろを開けると、黒ざとうとおばあちゃんとかせいのドーナツが入っていた。アマたちも人間のおやつを食べることはめつたにないから大喜びだ。アマが近くの池に水を飲みに行くと、見たことのないカエルがぼくたちをじつと見ているのに気づいた。

島のカエルより少し大きくて、あごが白い。それに何だかさびしそう。

「きみ、見かけないね。どうしたの。」  
と聞くと、

「ぼくは、シロアゴガエルのシロ。東南アジアから来たんだ。港で人間の後について船に乗ってみたらここに着いたんだ。するとここではぼくを『外来種』とよんで、みんながいじめるんだ。家ぞくも友だちもいなくてさびしい毎日さ。さつきも人間に追いかけられたからくたくたさ。おなかもすいているんだ。きみたちの食べているドーナツがおいしそうで見えていたんだ。」  
と言った。ぼくたちは、すぐにシロを仲間に入れて、いっしょにおやつを食べた。

ぼくは、学校で総合の時間に外来種が島に入ると、もともといた生き物を食べたり、数や住む場所が変わったりして、少しずつ島の自然が前と違っていくことを勉強した。だから、外来種をたいじする人たちの気持ちも分かる。でもシロは、まちがえてこの島に來ただけで、ちつとも悪い子じゃない。ぼくは、なやんだ。うんと考えた。そして、

「ねえ、アマ、ケーナ、何とかしてシロを東南アジアに帰してあげようよ。」  
と言った。ぼくたちは作せんを考えた。シロが見つから

ないように、アマは大きな木の葉を集めてシロにかけた。ケーナはつるを取ってきて、葉っぱがとれないようにむすんだ。まるで葉っぱの着物を着てるみたいになった。そして、ぼくはぼうしの中にシロをそっと入れて、家に連れて帰った。ぼくたちは、シロが人に見つからないように夜の船にのせることにした。ちょうど今夜は花火大会。ぼくは花火を見に行くと言って、家を出た。シロをまたぼうしに入れて港にむかった。港は花火大会の人でいっぱいだったけど、みんな花火の方をむいていてぼくたちには気がつかない。そこにアマとケーナも来た。三人で、

「元気でね。」

「もうまちがって船にのったりしないでよ。」

と言って見送りをした。そのときパンパンと花火が上がった。花火の音が、シロにさよならと言っているようにも、家に帰れてよかったねと言っているようにも聞こえた。

「外来種に会って、自然を守ることのむずかしさや命の大切さを考えたね。」

「協力してシロを助けられてよかったね。」

と、話しながら帰った。こうしてまた、だれにも言わないぼくのひみつが一つふえた。